

## 第2章 銃後

# 布団にもぐつて行つた必死の通信

木田忠夫さんのお話から

○**通信** 郵便、電信など  
の業務。

私は昭和二年（一九二七年）にニセコで生まれ、昭和十五年に札幌の札幌通信講習所に入りました。そして、大東亜戦争が始まりました。二年コースの学校でしたが、戦争と同時に半分の一年で職場に行けということになり、昭和十六年に留萌の郵便局に就職し、通信オペレーターとなりました。

○**モールス信号（符号）**  
長短二種の信号を組み合  
わせて文字や記号を表す  
電信の符号。

○**機動部隊** 航空母艦を  
中心とし、巡洋艦、駆逐艦

などで編成され、航空戦  
を主な任務とする高速艦  
隊。

○**艦砲射撃** 軍艦に備え  
つけてある大砲などから  
弾丸を発射し、ねらい撃  
つこと。

○**グラマン** アメリカの  
軍用機メーカー。第二次  
世界大戦では、戦闘機F  
4F、F6Fが有名。

私は、郵便局でモールス信号を扱う通信オペレーターをしましたが、ほとんどが軍事通信で  
した。通信を受けて、部隊に届ける仕事をしました。職員ではないほかの仲間は、特別幹部候  
補生で兵隊になりましたが、私は通信オペレーターだつたため、兵隊に行くことはありません  
でした。

そして、終戦一ヶ月前の昭和二十年七月十四日から十五日に北海道空襲がありました。下北  
半島にアメリカの機動部隊が来て、空母レキシントンが主体になり、室蘭に艦砲射撃を行つた  
のです。レキシントン級の空母が十三隻も来て、グラマンが二千機来て、北海道の主な港を徹  
底的にたたいたのです。根室はほとんど全滅でした。

留萌は十四日に空襲を受けました。私は郵便局の泊まり勤務の日で、早朝、六時か七時くら  
いだつたと思いますが、眠い目をこすつて窓を見ていました。

郵便局はちょうど高台にあって、下の方に港が見えるのです。ぼんやり見ていましたら、立  
派な飛行機が目の前に来たのです。私は、日本も随分すばらしい飛行機をつくつたなと思いま  
した。アメリカ軍から空襲されるなんてだれも思つていなかつたのです。

○疎開 そかい 子どもや病人ひと  
お年寄りなどを戦争の被ひ害がいの受けやすい地域ちいきから  
より安全な場所うつに移り住まわすこと。

○機関銃 きかんじゆう 引き金ひきのひを引ひいている間ま、自動的・連続的れんぞくてきに弾丸だんがんが発射はっしゃされる銃じゆう。

飛んできたグラマンはすごい能力で、港の船を一斉攻撃いつせいこうげきしました。その機銃きじゆうの音は、日本軍が撃つ機関銃きかんじゆうのカタカタカタという音ではなくて、ザーッというものでした。郵便局の上空から射撃が始まつたのですが、ものすごい音でした。この音を聞いたときにこの戦争は完全に負けたと思いました。

泊まつていた交換手こうかんしゆも五、六人いたのですが、みんな職場から防空壕ぼうくうごうに逃げました。しかし、通信担当である私は、逃げるわけにはいかなかつたのです。私は慌てて布団あわを持ってきて、通信機の上にかけ、そこにもぐつて通信していました。札幌や旭川に、空襲くうしゅうを受けていると通信しなければならないのです。あのころは、お国のためにという時代ですから、任務にんむを与えられた自分としては、その任務を果たさなければならないという気持ちでいました。

留萌るもいには、日本軍も少しいて小学校の裏に穴を掘つて機関銃きかんじゆうを撃ちましたが、グラマンの機銃とは全然レベルが違いました。港は船が攻撃されて、火の手が上がつていきました。

空襲の犠牲ぎせい者は、船員たちです。何人もの船員が血だらけになつて肩に担かがれて病院まで行つたのを見ました。撃たれた人は病院まで血だらけで歩いていました。

そしてその晩、留萌の市民は一斉に疎開そかいを始めた



イメージ図

通信オペレーター

のです。留萌のまちは無人になり、いるのは我々と消防ぐらいでした。私は疎開できませんでした。動いてはだめだと軍隊から言わっていました。通信を確保しなければいけないからです。アメリカ軍に機銃で撃たれたらもう終わりです。

留萌のまちは真っ暗闇になり、本当に死のまちのようでした。空襲のときは生きた心地がしなかつたというのが本当のところです。また来たら完全に生きて いられないと思つて いました。

次に、留萌沖で攻撃を受けた船の話です。これは終戦から八日ほどたつたときのことでした。樺太から避難民を乗せた引揚船で八月二十二日に出航した泰東丸、第二振興丸、小笠原丸の三隻が国籍不明の潜水艦に魚雷攻撃を受けたのです。

泰東丸は、沖合で沈没して、一人も助かりませんでした。小笠原丸は増毛沖で沈没し、七百二十名のうち、助かったのは六十一名だけでした。あとは全員死んでしまったのです。

○魚雷 艦艇や航空機から発射し、水中を自走して敵の艦船を撃沈させる兵器。

ただ一つ沈没を免れたのは第二振興丸でした。船倉に魚雷が命中して、大破炎上したのですが、約三千六百名の乗船者の中、五百名は死んでしまいました。船の中はひどい状態だつたようで、魚雷の爆風で吹つ飛んだ首のない死体や片腕のない人、天井からぶら下がつて いる女の人の遺体などがあつたそうです。



イメージ図

空爆

朝の八時か九時ぐらいに岸に遺体いたいが並べられ、お母さんの遺体いたいにしがみついて泣いている子どもがいました。さらに、港の海面は死体だらけでまさに地獄じごくでした。

ただ、ありがたかったことが一つありました。あのころは食べ物が何もなく、芋いもかすや中国のトウモロコシみたいなものしかなくて、白いお米なんて食べたことがありませんでした。私は栄養不良えいようふりょうになつて体があちこち腐くさっていました。そういう状態のときに、第二振興丸に米や干しみそが積んであり、我々に配られました。血や海水がまじつているかもしれないような、黄色くなつた米でも、本当においしかつたと今でも覚えています。

食料事情じじょうは本当に厳きびしかつたです。これは、今の子どもたちに言つて聞かせたいです。食べ物のありがたみを知つてほしいと思います。また、今、いかにいい生活をしているかということに気付いてほしいと思います。

私は、終戦の一ヶ月前に空襲の体験があり、悲惨な船の状況も間近に見ているわけです。戦争は、戦地から遠く離れた北海道でも大空襲が行われ、罪のない女、子どもが乗つた引揚船ひきあげせんも魚雷ぎょらいでやられたのです。

戦争は悲惨ひさんですごくむごたらしいものだから、絶対に風化ふうかさせないように語り継つづいでいかなければならないと思つています。これは自分に課せられた義務だと思つています。

みなさん方も、戦争にのめり込むような動きになつてきましたら、やつぱり戦争に反対するという声を上げないとダメだと思います。戦争は二度と起こしてはいけないのです。

## DATA

平成21年度厚別区平和事業

聴き取り

・平成22年3月3日

・厚別区役所



**木田忠夫(きだ・ただお)さん**

・昭和2年(1927年)生まれ

・札幌市厚別区在住